

「御物」の経済

室町幕府財政における贈与と商業

桜井英治

Economy of Shogun's Treasure: Gift-giving and Trade in Muromachi Shogunate's Finance

- ① 常御所の料足引付
- ② 贈与としての守護出銭
- ③ 贈答品市場
- ④ 同朋衆と御倉奉行
- ⑤ 「遣唐扇子」と献物システム
- ⑥ 「御物」と貴族社会

【論文要旨】

一五世紀の室町幕府は次第に贈与への財政的依存を深めていったが、小論ではこの財政構造下のモノの流れを、京都の都市経済や対外貿易との関係をふまえながら解明した。義教時代半ば以後、幕府は儀礼の際の禄物すら現物で支給することが困難になり、次第に切符（支払指圖書）を利用する頻度が増えていったが、このような財政難のなかで将軍は、五山禅院に御成した際に将軍に献上される引物をそのまま修理の必要な寺社に寄付することにより、事実上公庫にまわった手をつけることなく寺社修理を実現できる献物システムを考案する。引物の寄付をうけた寺社はそれら売却・換金するためのオークションを開いたが、このオークションはいったん役割を終えた贈答品をふたたび新たな贈与の環に還流させる贈答品市場としての機能を果たしていた。また、このように将軍が引物を寺社に寄付することが常態化してくると、逆に引物を将軍に受納してもらえることが贈与者にとって榮譽と意識されるようになり、この献

物による新たな交配の結果、将軍家「御物」は美術品コレクションとして一層洗練されることになった。幕府は日明貿易における輸出品の調達も多くは五山禅院や諸大名からの贈与に依存したが、とくに「遣唐扇子」は五山禅院への年始御成の際の引物を利用したことにより、他の輸出品に比べてきわめて高い調達率を実現した。五山禅院はそれを主として絵師への誂えによって調達していたが、これらの絵師は京都の都市経済とも密接な関係を有していた可能性が強い。

将軍家「御物」は、しばしば窮乏した貴族に貸与され、彼らの資金繰りを助けたが、この機能に注目するとき、将軍家「御物」は同家の私有財産であると同時に、貴族社会全体にとっての共有財産でもあったという側面がうかがえる。ところが義政時代になると、財政難から「御物」の大量売却が進み、その結果、将軍権力は貴族たちの窮地を救う術を失い、経済的求心性を大幅に喪失していったのである。